

郷里に関西一の分教場を寄付

『大谷仁兵衛』

(広報委員会)

▲大谷仁兵衛(おおたににへい)氏は、慶応元年(一八六五年)近江高島郡三谷村(現滋賀県高島市今津町椋川)に栗田長五郎の三男として生まれました。幼名を捨吉と言ひ、明治十三年(一八八〇年)、京都の出版書店『大谷屋』に奉公に出ました。

明治二十八年(一八九五年)才覚と人物を認められ大谷家に入籍し、名を大谷仁兵衛と改めました。明治三十五年(一九〇二年)には経営不振に陥っていた『帝国地方行政学会』(現株式会社ぎょうせい)を継承し、同社で我が国で初の加除式法規集を発案し『法規全書』を出版しました。



大谷仁兵衛氏(『区誌 椋川』より)

その後『内外出版会』・『東西医学社』・『帝国法規出版』などを創立。また印刷技師であった杉本京太に資金支援を行い和文タイプライターが開発されると、翌年特許を取得の上、大正六年(一九一七年)自ら社長となり資本金三十万円で東京市京橋区(現東京都中央区京橋)に日本タイプライター株式会社(昭和六十年(一九八五年)キヤノンが資本参加。現キヤノン・エヌ・ティイー・シー株式会社)を設立しました。

昭和三十一年(一八五六年)に、九十二歳で亡くなっています。
(参考:『ウィキペディア』)

▲成功をおさめた大谷仁兵衛氏が、自分の出身地である椋川の学校の荒廃が激しく、新築の必要があるなかで、村が資金不足に悩んでいることを伝え聞き、学校建設費用の寄付を申し出ました。

大正十一年(一九二二年)十二月、現在の椋川分校敷地に完成した校舎は、鉄筋ブロック銅板ふき耐震耐火構造で、普通教室のほか、特別室・裁縫室・応接室・事務室・図書室・会議室・雨天体操場・水道設備などを備え、この当時としては県下でも他に類を見ないほどの充実したものでした。
(参考:『広報たかしま』)

▲大谷仁兵衛氏とこの分教場建築のことについて、澤田純三氏が『区誌 椋川』の中で、次のように記されています。

す。

『……山裾に学校が建ったのは、捨七が十歳の時(明治十年)であった。弟の身で行く末を案じていた矢先に、学んだ「無学而不成(ガクナクシテナラズ)」の一語は、脳裏に深く染みこんでいった。

京都の四大書肆(しよし)に数えられた大谷家で働き始めたころ、故郷の学校が焼けたり教員が来ないなどの話を耳にして、歯きしりをしたに違いない。

大谷氏が東京の業界に雄飛すること三十年、父祖の地に報恩するには学校に諮ったのは大正八年(一九一九年)のことであった。

当時二十四歳の青年であった私の父は「年代記」の中で、大正十年の椋川区の移ろいを

「学校狭クシテ増築ヲ要スルトハ数年前ヨリ言イ居ル所ナルガ 金員ヲ要スル問題トテ今日尚其俛ナリキ、然ルニ此度大谷仁兵衛氏ノ発案ニテ小谷口上ノ丘ニ新築セヨ費用ノ大部分ヲ補助スルトノ申出ニ」

当区民相談シ直ニ之ニ応ジタリキ
初メ大谷氏八木造校舎ノ計画ニテ当区民モ亦(また)之レガ用材ヲ集ムルニ意ヲ用ヒタリ、然ルニ大谷氏ノ心変リテ洋館建ノ校舎ノ必要ヲ説カレ(略)……大正十年七月二十四日地鎮祭ヲ行ヒ直チニ工事ニ着手セラレタリ

……(略)……」

校舎と不老園の新築竣工式は、大正十一年(一九二二年)十二月十三日に執行され、高島郡長をはじめ郡会議員等の多数の来賓を招いて、洋風・上下水道完備の新校舎が披露された。……十三万余円の巨費を投じて前後三年に及んで竣工した分教場は、鉄筋コンクリート造り銅板葺きという滋賀県下にまいったく例を見ない洋館建てであった。……

洋風校舎を新築する決断を下した大谷氏には「教育の成果を期するにはよき教員を得るに如かず」という深謀があつて、校地続きの一段高い展望の佳い所に、堂々たる和風の教員住宅も建てられたのである。大谷氏は「漢学」を愛し、老子の谷神不老の語に惹かれて、椋川校の敷地一帯を財団法人不老會の所有地と登記してその事務所を椋川校の教員住宅の棟続きに設置した。



校舎お別れ会 S53(『区誌 椋川』より)

また、この丘に上る凡そ三百メートルの道路に架かる橋には、不老橋の銘版をはめ込んで、谷神不老の信條を吐露したのである。』